

018

令和七年度 個別学力検査等 (前期)

令和7年度個別学力検査  
医学部保健医療学科(看護学専攻)  
前期日程 小論文問題  
名古屋市立大学 学生課入試係 052-853-8020

許可なしに転載、複製  
することを禁じます。

# 医学部 保健医療学科(看護学専攻)

## 小論文試験

### 注意事項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけません。
- 2 問題冊子は一冊で、四ページです。
- 3 試験開始後、すべての解答用紙に氏名(カタカナ)及び受験番号を記入しなさい。受験番号が正しく記入されていない場合は、採点できないことがあります。また、氏名(カタカナ)及び受験番号以外の文字、数字などは、絶対に記入してはいけません。
- 4 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。解答用紙は二枚です。
- 5 この冊子は試験終了後、持ち帰りなさい。

次の文章を読んで、後の問に答えなさい。解答はすべて解答用紙の解答欄に書きなさい。

現代は「個を尊重する社会」なのか？

今の社会は「個を尊重する社会」と言えるでしょうか。私たちが、拘束力が強く閉鎖的な集団を脱し、「一人」になることを求めた理由の奥底には、「集団ではなく個を尊重したい」という願望がありました。

たしかに、かつての社会より、多様な主義や信念は尊重されるようになりました。性的指向については、多様性に配慮する方向で変化が進んでいます。一〇年前であれば、性的マイノリティを表す「LGBTQ」などといっても何のことか分からない人も多かったでしょう。

一九八〇年代であれば、結婚をしない人生を貫き通すことはけっこう大変だったかも知れませんが。結婚しない人に「一人前ではない」と厳しい言葉が投げかけられたり、昇進で差別されたりすることもありました。そう考えると、私たちは「個を尊重する社会」に生きているように感じます。

しかし、何でも自由に言えるようになったかという点、そうでもない気もします。たとえば、友人であっても気を遣って、なかなか深い話ができない、ということはないでしょうか。会社で管理職に（ア）ついている人であれば、「今は何でもハラスメントにされてしまうから、部下とどう接したらいいかわからない」という人もいるでしょう。「個を尊重する社会」というのは、一人ひとりがそれぞれに独立した意見を持ち、それを率直にぶつけられる社会という意味合いもありました。誰もが、気を遣いつつも、率直に意見をぶつけ合うことで、よりよい社会を築いていく。そういった対話のある社会が目指されてきたのです。

果たしてそうだった社会は実現できたのでしょうか。世の中を見渡してみると、実際に到来したのは、目の前の他者に対して意見や批判をすることを憚り、それぞれが自分の（イ）からに閉じこもる社会、あるいは、検索をつうじて、互いに意見の合致している人のみが結びつき、意見の合わない人は寄せ付けない分断型の社会ではないかと思うこともあります。そこからは、個を尊重する姿勢を読み取ることはできません。

では、なぜこのようなことが起きてしまったのでしょうか。この謎を読み解く鍵として、本書では「人それぞれ」という言葉に着目します。

### 相手を否定しない技法の発達

個人化と「人それぞれ」に強い親和性があるように、「人それぞれの社会」と「個を尊重する社会」は、じつは非常に近い位置にあります。というのも、「個を尊重」した

からこそ、「人それぞれ」に(ウ)おちいつてしまう、ということがたびたびあるからです。詳しくみていきましよう。

「個を尊重する社会」とは、個々人の選択や決定を尊重する社会です。「一人」の生活の(エ)しんとともに、生活のさまざまな場面で、個人の希望や選択がとりわけ重視されるようになりました。私たちは、集団ではなく自らの意思にしたがって、なんらかの行動を起こすことができるようになったのです。

このような社会では、いわゆる「べき論」を使って、相手の行為や主義・信条に申し立てをすることはあまりできません。具体的に言うと、「男性ならばこうあるべき」、「部下ならばこうあるべき」などといった形で、なんらかのカテゴリーを持ち出して他者に意見をすることは、こんにちでは容易ではないのです。皆さんも思い当たるのではないのでしょうか。他者が表出した意見や行動は、いったん受け止めるというのが、個を尊重する社会の流儀なのです。

このように、個人の希望や選択が重視されるようになると、誰かの希望や選択に対して、否定的な意見をなかなか言い出せなくなります。というのも、相手の考えを否定する行為は、「相手の考えや行動を尊重しない行為」と解釈されかねないからです。だからこそ私たちは、相手の考え方や行動を否定しないよう細心の注意を払います。

### 「人それぞれ」が重宝される若者の友人関係

このような傾向は、若者の友人関係に(オ)けんちよに表れています。日本では、一九八〇年代から、友人と深く関わろうとせず、互いに傷つけ合わずに、場を円滑にやり過ごすことに重きをおく友人関係が目立つようになりました。土井隆義どいたかよしさんはこのような友人関係を、お互いの感覚のみに(カ)依拠し、相手を傷つけないよう過剰に配慮する①「優しい関係」と表現しています。場を円滑にやり過ごすには、相手を否定しない、あるいは、傷つけないコミュニケーションの技法が有効なのです。

とはいえ、「否定しない」というのは、そう簡単にできることはありません。もちろん、明確な否定表現や中傷表現は避ける、「べき論」は避けるといった形で、簡単な予防は可能です。しかし、相手を否定したかどうかの判定は、多くのコミュニケーションにおいて、(キ)あいまいな領域に留め置かれたままです。というのも、なんらかの表現に対する否定判定は、結局のところ、発せられた言葉や行動を受け止める相手の気持ちにゆだねられているからです。

たとえば、友だちから進路についての相談を受けたとしましょう。このとき、友だちの話す進路について「あまりよくない」と思ったとしても、それを伝えるのは容易ではありません。伝え方によっては、相手に「自分のことを否定された」と思われるかもし

れないからです。もっと簡単な例で言うと、相手を（ク）褒めたつもりだったのに、反対の受け取られ方をする、ということは珍しくありません。

このような状況は、私たちに非常に（ケ）厄介な課題を突きつけます。私たちは、コミュニケーションの正解が見えないなか、相手の感情を損なう表現を避けつつ、その場を穏便にやり過ごすよう求められています。このような場で重宝されるのが「人それぞれ」という表現、または立ち位置です。「人それぞれ」という言葉は、相手の意向を損なわずに受容するという難題に対して、最適解を提供してくれます。

相手の考え方に違和感をもったとしても、「人それぞれ」と言っておけば、ひとまず対立を回避して、その場を（コ）取り繕うことができます。「べき論」を使って、規範を押しつけてくる人よりも、「人それぞれ」と言って、相手を受け入れてくれる人のほうが好まれるでしょう。私たちは「人それぞれ」という言葉を使うことで、さまざまな場を穏便にやり過ごしているのです。

（石田光規著

「人それぞれ」がさみしい

「やさしく・冷たい」人間関係を考える

筑摩書房 二〇二二年より 一部改変

問一 傍線部(ア)く(コ)の漢字はひらがなに、ひらがなは漢字に直しなさい。  
ただし、必要な送り仮名もつけること。

問二 傍線部①「優しい関係」とは、具体的にどのような関係のことか、六十字以内で説明しなさい。

問三 著者は「べき論」とは反対の考え方としてどのような表現に着目しているか、本文中より五字で抜き出しなさい。

問四 著者が「個を尊重する社会になっていないのではないか」と考えるのはなぜか。百二十字以内で説明しなさい。

問五 あなたの日常生活において、「個を尊重する社会になっていないのではないか」と考えられる状況にはどのようなものがありますか。また、そのような状況において、あなたはどのように対処しようと考えますか。具体的な状況をあげたうえで、五百字以内で論述しなさい。